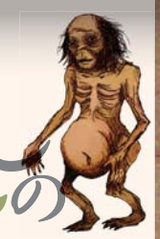
熊野の森から

怪しの熊野

其の二十五「巨人伝説」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

世界中で巨人伝説が残されている。日本ではダイダラボッチ伝説が有名だが、熊野にも大人（オオビト）伝説がある。山をも越える大巨人が巨岩を運んだ、大きな山に腰掛けて海で足を洗った、歩いていてよろめいた、その時に踏ん張ってできた足跡が残っているという話だ。古座川の一枚岩、田辺市の奇絶峡や上芳養、上富田町岡、中辺路には多く野中、猿川、熊野川、水上などで伝えられている。

古座川の一枚岩の下流側にある大人（オオビト）の足跡。熊野にはオオビトの足跡が各地に残っている。

また、古座川では「岩かじり」という巨人が岩をかじったために奇岩が多く見られるとのことだ。熊野灘に出たという海坊主の「高ぼっさん」、那智勝浦下里で月に女性を招く「桂男」、古座川七川で突如として大きく化ける「黒坊主」なども一種の大巨人だ。サイズは少し小さくなるが、熊野の山中に出没するタタラ（あるいは一本足）も巨人であり、体長は2～数㍍に及ぶ。

現在の航空写真で発見した巨大な靴底跡のようなモノ。実際には森林を伐採した後。かつて熊野の巨人は金属で得た豊かな経済を背景に国づくりに貢献したようだが、今の熊野の巨人はどうであろうか？　豊かな森林資源を背景にすれば未来の国づくりに貢献できる可能性は十分にある。(Google Earth Pro より)

このタタラであるが、ダイダラボッチの語源だという説がある。タタラから変じたダイダラに法師を付加したという。タタラは漢字では「踏鞴」と書くが、金属を鋳造する際に用いるフイゴの意味だ。鉱山と関わる怪異タタラは、金属神である天目一箇神（あめのまひとつのかみ）が凋落（ちょうらく）したモノだとも言われる。「目一箇」は一つ目の意味であり、タタラの特徴と共通する。鍛冶が鉄の色でその温度をみるのに片目をつぶっていたことや、あるいは片目を失明する鍛冶の職業病があったという解釈だ。ダイダラボッチも金属と関係する巨人であるが、片目の視力を失っていたとされることも多い。

柳田國男は、オオビトを意味する「大太郎」に法師を付加した「大太郎法師」がダイダラボッチの語源だと考察している。だとすると、オオビトも金属に関わっていた可能性がある。熊野に残るオオビトの足跡が金属を掘り出した穴ならば、巨人は金属を原資に国づくりを熊野から進めたと考えることもできる。金属、一つ目の巨人による国づくり、逆に国やムラを荒らす賊として巨人が存在したのなら、仮に巨人が金属に関わる人間の集団であったにしても、その経済力は強大であったことだろう。巨人伝説の残る熊野は、豊かな資源を背景に国づくりに貢献したのかも知れない。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。